

パネルディスカッション  
非認知能力と子どもの日本語の学習・教育—アイデンティティを捉え直す—

ボニー・ノートンのアイデンティティ概念  
—議論の前提として—

中山亜紀子（広島大学人間社会科学研究所）

## 1. はじめに

本発表の目的は、アイデンティティ概念を言語教育学に導入したボニー・ノートンの『アイデンティティと言語学習』（2023 原著 2000/2013、以下本書）から、ノートンのアイデンティティ概念を紹介することである。

ウィードン、ブルデュー、カミンズらポスト構造主義の理論からの影響を受けたノートンのアイデンティティ概念は、「どのように人が自分と世界との関係を理解しているのか、その関係が時と空間を越えてどう構築されるのか、そして人が未来への可能性をどのように理解しているのかを意味する言葉として」（ノートン：22）、また「多元的で矛盾しており、葛藤／闘争の場所であり、時間とともに変容する」（ノートン：179-185）ものとして定義されている。以下では本書に登場する協力者の話も取り混ぜながら、その特徴をいくつか説明しよう。

## 2. ノートンのアイデンティティ概念

### 2.1. 社会との接点に生じるアイデンティティ

ノートンが本書につながる研究を始めたのは、1980 年代末～90 年代であり、ソビエト連邦をはじめとする社会主義国の崩壊、それに伴う大規模な人の移動の始まりの時代であった。受け入れ国に到着した移民たちは、仕事や生活のために、受け入れ国の公用語を学ばなければならなかったが、「不公平と疎外の問題が浮上していた」（Darvin and Norton, 2015）。つまり、文化的、社会的に疎外されながらも、言語学習のためには「コミュニケーションへの参加が唯一の方法であるが、参加できるかどうかは、学習者がどうふるまうかによって評価される（ノートン：66）」という矛盾した状況の中で言語学習者らは言語を学ばねばならなかったのだ。

言語学習者らが置かれている、しばしば不公平な社会的文化的経済的状况を考慮に入れることなく、言語学習の成否を、学習者個人の問題としてきた社会心理学を中心とした言語習得研究に対する痛烈な批判と、ある個人とその人を取り巻くより大きな社会を研究の射程に入れようとする中で生まれたのがノートンのアイデンティティ概念である。よって、ノートンのアイデンティティ概念は、青年期の課題とされる心理学的アイデンティティとも、言葉づかいの中にその人のアイデンティティが現れると考える社会言語学的なアイデンティティ概念とも異なり、ある個人とその人を取り巻く、より大きな社会の接触の中で生じるものである。さらに言えば、その接触の仕方は一人ひとり異なる。

### 2.2. アイデンティティの複数性、葛藤／闘争の場としてのアイデンティティ

当然のことながら、ある人は一つのコミュニティにのみ属しているのではなく、さまざまな人々とさまざまな関係を結びながら生活している。同様に、一人のアイデンティティも一つではない。本書の協力者の一人、マルティナを例にすると、チェコスロバキア人、移民、母、言語学習者、労働者、妻などさまざまなアイデンティティをもっている（アイデンティティの複数性）。しかし、他者との相互行為の際、どのアイデンティティを使うのかは、たとえ同じ相手だとしても、時、場所によって異なっており、ある時には話せたり、話せなかったりする。マルティナは、自分の発音のせいで、周縁化されている（移民として構築されている）と気づいても抗議しようとはせず、「英語が母語の人々の中で英語を使うとき、居心地が悪く感じます。彼らは何の問題もなく流暢に話すからで、私は劣っていると感じます」（ノートン：180）と述べていた。しかし、ファーストフード店でのアルバイトでマルティナを「ほうきか何かのように」扱い、次々と仕事を言いつける若い他のアルバイトに対して、ついに「自分の子どもより若いのだから」と言い返して仕事をさせることができた。つまり、どのアイデンティティを発動し、構築させるのかには、学習者自身の行為主体性（agency）が関わっており、誰がいつ話す権利をもつのか闘争の中にある（葛藤／闘争の場としてのアイデンティティ）ともいえる。

### 2.3. 未来の可能性としてのアイデンティティ

一方でアイデンティティは、「こうありたい自分」としても描かれており、言語学習者が学習を通じて投資する対象でもある。例えば、ポーランド人のカタリナは、自身が母国で修士号を持つ教師であったこと（専門職女性）にプライドを持っており、カナダで得たお年寄りのための家事代行の仕事に対して、不満はないものの、自分自身を「別物」と感じていた。結局カタリナはその仕事をやめ、「専門職」を得るために、コンピューターのクラスに通い始め、彼女の専門職への投資を理解できなかった英語教師のいるクラスをやめてしまった（未来の可能性としてのアイデンティティ）。

#### 2.4. 時間とともに変容するアイデンティティ

さらにノートンは協力者が、自身を周縁化しようとする力に抗う際に使ったアイデンティティに特に注目し、「多文化市民」（エヴァ）、「言語仲介者」（マイ）と名付け、「母」および「主たる扶養者」（マルティナ）と呼んだ。特にエヴァが「多文化市民」としてのアイデンティティを発達させていくうちに、「話す権利についての感覚を身につけ（ノートン：185）」、エヴァの訛りをからかった客（チップを多くもらおうと思っているからそんな英語を話すのか）に対して、沈黙ではなく「こんな言葉を聞かなくてすむんだったら、訛りがなかったらよかったのと思います」と反撃できるようになったと述べている。このように、移民として周縁化されざるを得なかった言語学習者も、常にその位置に甘んじているわけではなく、時間の経過や言語能力の伸長とともに、アイデンティティを変容させ（時間とともに変容するアイデンティティ）、「アイデンティティを主張し、権力関係を再構築することで、ホスト国で力のある言語を話す権利を主張しようとする（Darvin and Norton, 2015）」とノートンは述べている。上述したマルティナと若い同僚との関係も同様である。

### 3. 希求としてのアイデンティティ概念

以上、駆け足でノートンのアイデンティティ概念の特徴をいくつか述べてきたが、本書のあとがきでは、外国語教育の文脈における文化教育などで著名な応用言語学者クレア・クラムシュは、本書執筆に隠されたノートンの欲望を、「言語学習者が英語の所有権を持つ、押しつけられたアイデンティティから自由になる、社会によって押しつけられた制度的共同体とは違う形で実践共同体を築く」、すなわち、「言語学習者の権利を取り戻す」と指摘している（ノートン：261）。ノートンのアイデンティティ概念は、言語学習を通して学習者をエンパワしたい、よりよい世界にしたいという希求から生まれているのだ。幅広い研究を渉猟したうえでつくられたアイデンティティ概念の下に、移民らを周縁化する社会への怒り、よりよい社会を希求する熱い情熱が隠されていることが、多くの人々を魅了する原因ではないか。

上記のように、ノートンのアイデンティティ概念にはいくつかの特徴があるのだが、疑問がないわけではない。すべての言語学習に適應することは可能な概念なのだろうか。例えば、外国語環境でマジョリティが言語を学ぶ場合や、ネットさえあれば目標言語のコンテンツに触れられるようになった現代の言語学習。さらにはノートンは、5人の協力者は「よい言語学習者」であり英語学習に強い意欲をもっていただとしている（ノートン：88）が、「学びたくない」という人々もいるだろう。そのような言語学習や言語学習者を分析するのに、アイデンティティ概念は有効なのだろうか。

ノートンの博士論文が元となっている本書には、以上のような疑問もあるのだが、ノートンのアイデンティティ概念は、応用言語学、第二言語習得研究における社会的転回（Block, 2003）の大きな推進力の一つであり、現在もまだノートンと共著者たちによって、進化を続けている。今後、アイデンティティ概念の進化を見極めつつ、日本語学習への応用可能性を考える必要があるだろう。アイデンティティ概念発展への寄与もあるはずである。本書にはまた、英語の力を伸ばし、自分の場所をカナダに見つけていこうとする移民女性たちの、非常に説得力のあるストーリーという魅力もある。アイデンティティ概念とともに、ストーリーの魅力にも触れていただきたい。

#### 【引用文献】

ノートン、ボニー（2023）『アイデンティティと言語学習—ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐる広がる地平』中山亜紀子、福永淳、米本和弘訳 明石書店（原著 Norton, Bonny 2013 Identity and Language Learning: Extending Conversation.）

David Block, (2003) The Social Turn in Second Language Acquisition. Georgetown Univ Pr.

Ron Darvin and Bonny Norton, (2015) Identity and a Model of Investment in Applied Linguistics. Annual Review of Applied Linguistics, 35, pp. 36–56. Cambridge University Press, doi: 10.1017/S0267190514000191

